

2008年3月期 第1四半期決算 電話説明会 説明概要

「2008年3月期 第1四半期決算 補足資料」をもとに説明致しましたので併せてご覧ください。
お手元がない場合は、お手数ですが当社 IR サイトよりダウンロードをお願いいたします。
<http://www.olc.co.jp/ir>

- ・実施日 2007年8月2日(木)
- ・説明者 経理部長 横田 明宜

【連結業績】

まず、資料左側の連結損益計算書を簡単に確認させていただきます。

当四半期は、前年同期と比較して、

- ・売上高は、3.2%増の757億円、
- ・営業利益は、51.3%増の64億円、
- ・経常利益は、74.3%増の57億円、
- ・四半期純利益は、102.5%増の32億円

と増収増益となり、第1四半期としては、過去最高の売上高・利益となりました。

【セグメント別売上高】

セグメント別売上高について説明します。

- ・テーマパーク事業は、前年同期比3.2%増の634億円、
- ・複合型商業施設事業は6.9%増の54億円、
- ・リテイル事業は、8.5%減の36億円、
- ・その他の事業は、13.0%増の31億円

となりました。

増減要因について説明します。補足資料の右側をご覧ください。

テーマパーク事業

入園者数及びゲスト1人当たり売上高が増加したことなどにより、テーマパーク事業の売上高は、19億円増となりました。

入園者数及びゲスト1人当たり売上高の前年同期比較については、右側の表をご覧ください。

入園者数は、前年同期を若干上回りました。主な増加要因としては、5月に東京ディズニーシー5thアニバーサリーのフィナーレであったこと、昨年9月にオープンした「タワー・オブ・テラー」が引き続きご好評頂いたこと、などが挙げられます。

また、ゲスト1人当たり売上高も、前年同期に比べ上回りました。チケット収入は、昨年9月に行ったチケット料金改定の効果により上回り、また飲食販売収入も、気温上昇に伴いアイスクリームやドリンク類が好調だったことなどにより、若干上回りました。

なお、東京ディズニーシー・ホテルミラコスタの客室稼働率は前年同期とほぼ同様となりました。

複合型商業施設事業

ディズニーアンバサダーホテルの宿泊収入の増などにより、3億円増となりました。これは、前期に行った客室などの全面リニューアルを当期は行わなかったことなどにより、客室稼働率が上回っていることが要因です。

リテイル事業

店舗数が減少していることなどから商品販売収入が減少したものの、前期の傾向から比べると減少幅は縮小し3億円減に留まりました。リテイル事業については、後程、補足させていただきます。

その他の事業

4月より、モノレールの運賃改定を行ったことなどにより、3億円増となりました。

なお、パーム&ファウンテンテラスホテルの客室稼働率は、前年同期とほぼ同様となりました。

【セグメント別営業利益】

次に、セグメント別営業利益について説明します。

なお、全体では売上高が前年同期比3.2%増となった一方、売上原価は0.2%増と抑制出来た為、営業利益では、51.3%増の64億円となりました。

増減要因を説明します。資料左側の中段をご覧ください。

なお、第1四半期でセグメント別営業利益を開示させて頂くのは、初めてとなります。

テーマパーク事業は、14億円増の59億円となりました。

売上高の増加に加え、資料右側の売上原価の増減要因でも記載している通り、前期好評だったスペシャルイベント「リロ&スティッチのフリフリ大騒動~Find Stitch!~」を当四半期も展開することなどで、エンターテイメント・ショー製作費を3億円低減させるなどコストの抑制に努めた結果、営業利益は増加しました。

複合型商業施設事業は、3億円増の2億円となりました。

売上高の増加に加えて、前年同期に発生したディズニーアンバサダーホテルの客室などの全面リニューアル費用が、当期は発生しないことなどから営業利益は増加しました。

なお、前期に発生した全面リニューアル費用は合計で約5億円でしたが、そのうち前年同期に発生した費用は2億円弱でした。

リテイル事業は、1億円増の営業損失2億円となりました。

前期より引き続き推進している費用構造改革の効果により、営業損失が縮小しました。

後程、売上高と併せて補足します。

その他の事業は、2億円増の3億円となりました。

売上高の増加に加え、前年同期に発生したモノレールの車両点検費用が当四半期は発生しなかったことなどにより、営業利益は増加しました。

セグメント別営業利益の傾向は、以上となります。

なお、資料左側の右端に⑤と記載している部分がございますが、こちらは売上原価の人件費と諸経費間において、「エンターテイメント・ショー出演者の雇用契約変更」に伴って、振替が発生したものです。

【経常利益・四半期純利益】

これまでお話した営業利益の増加に加えて、受取利息・有価証券利息の増などにより、営業外損益が2億円の増益となった為、経常利益は24億増の57億円となりました。

四半期純利益も、16億円増の32億円となりました。

以上が、第1四半期決算の内容となります。

【補足情報：リテイル事業】

リテイル事業について補足をさせていただきます。資料右側中段の【補足情報】をご覧ください。

こちらは、売上高の「四半期別 前年同期比の推移」を表したグラフとなっています。

当四半期の売上高は、先述した通り、店舗数が減少していることなどから、依然として前年同期を下回っているものの、前期の四半期の傾向と比較すると減少幅は縮小していることがご覧頂けると思います。なお、下期から新たなクリエイティブコンセプトのもと開発された商品の本格導入や、新規出店を行う予定です。

費用面では、前期より取り組んできた費用構造改革のコスト改善効果として、当四半期では1億円効果が出ました。その主な費用は、店舗賃料、物流費、本社オフィス賃料、人件費などであり、通期では4億円程度の改善効果を見込んでいます。

これらの通り、リテイル事業の改善計画は着実に進んでいます。

【総括】

それでは、最後に総括をさせていただきます。

第1四半期決算を前年同期と比較すると、

テーマパーク事業において入園者数及びゲスト1人当たり売上高が増加したことに加え、エンターテイメント関連費用の低減などコストを抑制出来たことにより、前年同期と比べて増収増益となりました。また、リテイル事業においても、売上高の減少幅は縮小し、営業損失においても費用構造改革により改善しました。

なお、数値の開示はしていませんが、第1四半期の業績予想と比較すると、

テーマパーク事業において、そもそも入園者数目標を前年同期より低く設定していたこともあり、売上高・営業利益ともに上回ったこと、またリテイル事業の業績も若干上回ったこと、そして10億円程度の費用が第2四半期以降へ時期ずれしていることなどから、連結での売上高・利益は大幅に上回って推移しました。

ただし、中間期及び通期の業績予想については、5月に発表したものから変更していません。

現時点では、先述の通り、中間・通期の業績予想に対して上回っているものの、テーマパークの集客ボリュームが大きい第2四半期以降の天候リスクなどを踏まえて、変更しません。

以上